

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 ご利用者 : 40代・男性・要介護3

利用期間 : 令和3年4月よりしおん入所

傷病名 : 左被殻出血、未破裂右脳底動脈上小脳動脈分岐部動脈瘤、高血圧、全失語、重度右麻痺、高次機能障害

経過 : 令和2年10月初旬、勤務先にて倒れA病院に搬送される。術後10月末にリハビリの為、B病院に転院。R3年4月しおんに入所される。

内 容

震災後ご家族はI市内に残ったが、利用者さんは令和2年4月に独り身となり、こちらに新居を持たれている。自炊は殆どせず、コンビニの惣菜ばかりの食生活をしてきた。趣味はバイクと読書、タバコやお酒も嗜んでおり、口数が少ない性格だった。R3年4月リハビリ目的でしおんに入所、失語症もあり上手くコミュニケーションが取れず、全ての声掛けに対し「あ…はい」と遠慮がちに答える様子が見られていた。また、他の利用者さんから話し掛けられた際も返答する事ができず、うつむきながら居室に戻られる姿が見られ、歳の差もある為か自身の状態を知られたくない様子だった。さらにコロナ禍により月1回の面会も時間制限があり、ご家族との関りも少ない状況が続き、益々心を閉ざしていきような表情が伺えた。

なんとか笑顔になっていただきたいと日々声掛けをする中で、七夕の願い事を聞いたところ、首を傾げながら考える利用者さんが「ラーメン」と短冊に書き示した。それならば「ご家族と一緒にラーメンを食べに行きましょう」と答えると、心を開いてくれたような笑顔を初めて見せてくれた。ご家族にその様子を伝えると「今まであまり一緒に食事に行く事がなかったからね」と喜ばれていた。

その事がきっかけで、日々の関わりの中でも徐々に笑顔が見られるようになり、積極的に自分の事は自分で行い、毎日他の利用者さんに新聞を届ける姿が見られるようになった。またご家族もバイクの本を持ってきてくれる等できる限りの事をしてくださり、利用者さんらしい施設での生活が送れるようになっていった。コロナの状況を見て外食とドライブを計画、ご家族より「ドライブをするならM町を見せてあげてください」との要望が聞かれた。M町は震災前に住んでいた土地で職場もあった土地だった為、震災を思い出してしまうのではと不安にも思ったが、利用者さんも笑顔で了承された。12月中旬に、海が眺められ

る神社へ向かい少し早めの初詣をした。その後、思い出の土地をドライブ。感慨深いような表情で景色を見ていたが、ご家族との待ち合わせ場所に向かう利用者さんの表情に、次第に笑みがこぼれていった。久しぶりのご家族との食事では、施設では見られない安心したような表情が見られた。「野菜とか食べなかったのに全部食べてる」とご家族は驚きながらも喜ばれていた。利用者さんの以前とは違う様子を見て安心したのか「今度は中華にしようか」と明るい声で話掛けられていた。お話を聞くとご両親もまた不安と葛藤の毎日を送っていたようだった。今回の外食ドライブは、利用者さんだけでなくご家族にとっても不安を取り除く機会となった。現在利用者さんは、今後一人暮らしをする為の歩行訓練に励まれている。利用者さんとご家族の明るい未来に向け、希望を見出すきっかけとなる支援ができたと考える。